古き良き世界より

神凪響姫

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遊戯王をやりたい人生でした……。望んでいたものと違うカードゲームの世界にいってしまった少女がデュエルマスターになるまでのお話。

目　次

第一話　予想外の世界 ―― 1
第二話　カードゲーム、しよ？（威圧 ―― 6
第三話　初めての対戦 ―― 14

第一話　予想外の世界

――人は死ぬと天国に行ける、なんていう迷信を未だに信じている人はいないでしょうが、実際直面すると絶句してしまうものなんですね。

西洋の庭園を彷彿とさせる庭。透き通るような水が湧き出す噴水。そこから伸びる水路が樹木に潤いをもたらし、辺り一面を占める澄み切った空気が、清楚な雰囲気を一掃強固なものにしています。

……え？　白い何もない空間？　ヒゲの生えたジジイの五体倒置？　そんなの見ても面白くもなんともないじゃないですか。

だから敢えて、目の前に立つ変な人は視界から外していたのですが、無視したままだと話が進まないですし、状況が上手く飲み込めません。

なので説明プリーズ。すると老人はパァッと顔を明るくして起き上がりました。キモいんですけど。

「なんだかんだで死んじゃったから好きな世界に転生しても良いんじゃよ？」

「こいつ腹立つんですけど」

なんで疑問形なんですか。疑問をぶつけたいっていうか殺意をぶつけたいのですけれど。マジ宇宙なんですけど。

話の詳細を聞いてみると、なんでも、元いた世界で突然事故死したけれど、気が向いたから助けてあげたはいいが、一度死した人間が蘇ると輪廻がどうとか時空改変がどうのとか……意味不明な単語を散らしつつ長々とした説明をし始めました。間違いなく誤魔化しに

入っているのが確定的に明らかだったので適当に頷きながら聞き流すことに。
　それから15分後。
「というわけで、好きな世界を選んでちょ」
「その語尾は死語だと思います」
　しかしそんな簡単に言われても、行きたい世界なんて思い浮かびません。
　どうせ好きな世界に行けるのなら、自分のやりたいことができる世界がいいですね。そんな都合よい世界なんてあるはずが……いえ、ありましたね。
「カードゲームがある世界……いえ。カードゲームが大流行している世界がいいです。遊戯王デュエルモンスターズがある世界がいいですね」
　社会現象になって世界のシステムに組み込まれるような、今までとは常識からして大いに異なる世界。
　どうせなら、そういう世界に行ってみたいです。
　平和な世界でもいいけれど、この機を逃したら一生無い気がしますし。
「え？　ゆう……ごめんなんだって？」
「デュエルモンスターズです！　遊戯王の世界ですよ！」
「……あー！　ハイハイ、それね！　うん、分かってるよ分かってる！　おっちゃんちゃぁんと分かってたんだからね！　分かってて試しただけなんだからねバーカ！」
「なんで罵倒されなきゃいけないんですか」
　まったく、よく分からんジイサンですね。
　けれどもカードゲームの世界には行かせてくれるようです。いや、まさか本当に行けるとは……こんなチョロくて良いんでしょうか？
　もっと神の試練的なものがあってしかるべきだと思いますけど。
　まぁ、向こうが許可を出したわけですし、問題ないですよね。
「あ、でも、お主を特別扱いするのはこれきりだから。よくあるチート能力やら特殊な生い立ち設定は用意できんぞ？」

「別にいりませんよ」
そんなインチキは必要ないです。いや、デスティニードローとかシャイニングドローが欲しいとか思わなくもないですが、あると絶対ロクなことにならないと思うので。

そんなこんなで、ボクは転生することとなったのでした。

気がつくと、赤ん坊のボクは寝台の上で寝かされていて、両側から覗き込む両親の姿が。

……人生巻き戻しすぎですよ、もう。

それから十年。
わたしは小学生になり、ようやくカードゲームに触れる機会を得ました。
ええ、辛かったです。辛かったんですよ、今まで。
赤ん坊から人生リセットが、ではなく、カードゲームをやりたくて生まれ変わったのに、カードができなかったからですよ。
何故って、ボクは女の子ですから、カードゲームなんていういかにも男の子向けなアイテムやってると茶化されるんです。
この年頃の子供ってのは非常に面倒くさくて、男子に混ざって遊んでいると男女扱いされたり、仲良くしてる男の子とデキてるだのなんだのとゲラ笑いするんです。

「え？　お前女のくせにカードゲームやってんのｗｗｗ？　マジかｗｗｗｗおウチに帰ってプリキュアでも見てろよｗｗｗｗｗベララーｗｗｗｗｗｗ」

なんて言われる始末。ウザい小学生もいたもんですね、人が何したっていいじゃないですか。

からかわれるくらいならまだ良いんですが、勝負に負けると実力のせいじゃなくてカードのせいにして、カードを巻き上げようとする輩もいないとは言い切れません。実際そうやってレアカードを奪われたという話も聞きました。

そんな状況でカードゲームをしたって面白くもなんともないので、泣く泣く見送ることにしました。一体いつになったら遊べるのでしょうか……。

ですが十歳の時、転機が訪れました。家族の都合で引っ越した場所では、カードゲームが流行していて、男女問わず盛んに行われているんだそうで！

これには思わずガッツポーズですよ。残念ながら都心近くに住むことは叶いませんでしたが、この際なんだって良いのです。とにかくカードゲームがやりたくて仕方なかったボクにとって遊べればなんだって良いですハイ。

さらに幸いなことに、カードショップは小学校と家から近いところにあるので、学校帰りや休日に気軽に遊びに行ける距離だってことです。

これは遂に私の時代到来の予感がしますよ。やったこれで心おきなく海馬社長ごっことかできますよ！　近所の公園でやってると頭弱い子だと思われそうなのでショップでしかできませんしね（※実際やって追い出されても責任はとりません

え、どんなデッキが好きですかって？　そうですね……あまり多くは語れませんが、トリシューラは愛用してましたね、主に『インフェ

ルニティ』でお世話になりました。『甲虫装機』や『カウントダウン』、それに最近では『征竜』や『マーメイル』も使ってましたよ。ワンキル系も好きですがカウンターも愛用してましたね。ええ、割とガチでしたが何か？　大会はあんまり出ませんでしたけど。

さぁどんなデッキ作ろうかなー？　でもお小遣い少ないし、強いデッキ作れないかな。あまりお金がかからないデッキを作ろう。マシンナーズとかなら、構築済みデッキがあるし、『ギアギア』のセットが確か出たから、それで強化されてるかな？　ずいぶん前に出た『セイクリッド』も使いやすかったなぁ。プレアデスとトレミス高いからなんとも言えないけど。

色々な想像を膨らましながら、カードショップへ全速前進です。

一人で行くのはちょっと怖い……なーんて心配ご無用、既にお友達とお待ち合わせ済みなのです。同じクラスの紗雪ちゃんという子が、なんと一緒にカードゲームをやらないかと誘ってくれたんです！

やった！　これでボッチ呼ばわりされなくて済みますよ！　新しいデッキ組んでも友達がいなくて延々と一人で二つのデッキ回さなきゃいけないなんて事態もサヨウナラ。もうボクに怖いものなんてありません！　フハハ最強ではないか我が人生は！

さぁ、私の楽しい楽しい遊戯王人生の幕開けですよ！

「紗雪ちゃーん！（遊戯王で）遊びましょー！」

「リオンちゃーん！　いっしょにデュエマやろうよー！」

全然ちがうじゃないですかもぉおおおおおおおおおおッ!!!!!

第二話　カードゲーム、しよ？（威圧

デュエルマスターズ！

それは今、世界で注目を集めているカードゲームだ！

ルールは簡単！　４０枚のカードを用意し、デッキを作る！
手札を使い、クリーチャーを召喚したり！　呪文を唱えたり！　時には城を使いこなし、クロスギアの力を借りて、相手とのバトルに勝利しろ！
お互いのプレイヤーに用意された、五枚のシールドをブレイクし、相手にトドメをさした方が勝利となる！

さぁ。今すぐ君も、デュエマなう！

※なお、デュエルという名称がついているが、遊戯王デュエルモンスターズとはまったく関係がない。

「ちっきしょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ!!!」

第二話　　カードゲーム、しよ？（威圧

ああ、神様マジ何考えてるんですか。馬鹿なんじゃないですか神様。末代まで呪いますよ神様。長くて面倒だから神じゃなくてゴミ虫でいいですかね。

な・ん・で！　遊戯王じゃなくてデュエルマスターズの世界なんですか！　そりゃ遊戯王は『遊戯王デュエルモンスターズ』なんて名前でしたけど！　ちょっと似てるけど！　全然違うじゃないですか！

中身は宇宙の果てまで違いますよ！

「リオンちゃーん……デュエマ、やらない？」

そんなボクの心境などおかまいなしに、不安げな顔で下から覗き込む紗雪ちゃん。

くっ、なんというチワワ系オーラ！　構ってあげないと死んでしまいます的な雰囲気がビシバシと伝わってきますよ！　でも腕を寄せて胸を強調するのはやめて下さい。なんですかその武器は。

「デュエマ、ですか……」

手にとってみると、遊戯王のそれよりひと回り大きいことが分かります。

こうして手にするのは、初めてですね。デュエマは。

そりゃ、カードゲーマーだった私でも聞いたことがあります。世界的に有名なカードゲームメーカー、ＷＯＣが開発したＴＣＧ、『マジック・ザ・ギャザリング』。世界で最初に生まれたＴＣＧとして注目を集め、爆発的な人気を誇りました。

その会社が、メインターゲットを小中学生に移し、より分かりやすく、より簡単にしたものが、『デュエルマスターズ』です。

以上解説終わり。

当たり前の話ですが、デュエマが主流となっている世界に遊戯王なんてありません。ボクがやりたくて仕方がなかった遊戯王はありません。どれだけ探してもデュエマしかありません。ヴァンガードもＺＸもありませんけど。

試しに通りがかる人に「遊戯王って知ってる？」と訪ねてみたところ、「どこの王様？」と首をかしげられました。知っててとぼけてん

じゃないかと思わなくもないですが、世界的に有名なＴＣＧがカードショップに置いてない時点で諦めざるを得ませんでした。
ちくしょう。
まぁ、いいですよ。諦めますよ。
こうなったらデュエマやってやりますよ。
ＴＣＧ自体好きですから、ハマればきっとのめり込むのは想像できますしね。結構続いているカードゲームですから、多くの人に愛されているのでしょう。環境バランスも割と良いらしいと聞いた気がします。
十年も昔なので、かなりあやふやですけどね。
「まずカードプールを把握したいところですけど……」
遊戯王ほどではないのでしょうけど、デュエルマスターズの歴史も相当長いです。確か私が転生する前では、子供の頃からやってましたからね。恐らく十年くらいは続いています。
それだけ愛されているということでしょうけど、その分カードプールは相当なものになります。
実際、紗雪ちゃんに聞いてみたところ、数千はあるんじゃないかとのこと。たまにパックに封入されていない幻のカードも存在するとかなんとか。未確認カードが存在するのはどこぞのカードゲーム世界でも一緒のようですね。めんどくさ。
最悪なことに、ショップ定員の人に聞いても、正確なカード総数どころか、現状どれだけの種類のカードが出回っているのか分かっておらず、どの名称のカードがどういう効果なのかもイマイチ把握できていないんだそうで。おいおいそんなんで良いんですかアンタ。
生憎遊戯王一本に絞っていたボクは、ちょっと子供向けかなーと敬遠していたので、どういう環境なのか分かりません。
一応、聞きかじった程度のルールは知っています。しかし残念ながら、それはあくまで初心者中の初心者程度の知識しかありません。ルールを知っている、これは必要最低限、スタートラインに立った、あるいはその前段階の準備に過ぎません。強くなるには、相手が使うカードからデッキを把握する程度の知識は必要でしょう。

幸いなことに、紗雪ちゃんは私がデュエマ素人だと分かっています。カードゲームをやったことがない、と言っておきましたから、ええ。この世界のカードゲームは。

なので親切にもいちから教えてくれるそうで！　持つべきものは友達ですね！　わざわざ取扱説明書と公式ＨＰのＱ＆Ａとにらめっこしながら自分でデッキ二個使ってＷｉｋｉ見つつプレイなんてぼっちプレイとはおさらばですよ！

あ、なんか涙が……。

さ。とりあえずデッキを用意するところからです。

生憎、この世界に構築済みデッキなんて初心者向け上級者パーツ集め専用商品なんてありませんでした。なんて不親切な世界なんでしょうか。いきなりストレージからカード引っこ抜いて作れオラァなんてひどくないですか。子供はどうやってルール把握すればいいのやら。

とりあえず、一度カードがどういう感じなのか、実際見てみない限りには何も分かりません。どんなデッキを作れるのか、どういう風な特徴があるのか。ボクは何一つ知らないので――

「紗雪ちゃんにお任せします」

「ダメ！　ちゃんと自分で作るの！」

んな無茶な。

背中をグイグイ押されて、ストレージの前に立ちます。まぁ、どのみち見てみたかったので構わないんですが。

紗雪ちゃんもお手伝いしてくれるらしく、使いたいカードがあるならそれを使ったデッキにしよう、と提案。まだ見たこともないのでなんとも言えず、ごちゃごちゃに突っ込まれたストレージから見繕うことに。

しかしなんですかね。やっぱりカードゲーマーとしての血が騒ぐ

のでしょうか。カードを眺めているだけで幸せな気分になれます。
が、
「なんかストレージからカレーの匂いがするのが非常に気になるのですけれど……」
「そ、そういうカードもあるんじゃない？」
おかしくないですかそれ。
ちょっと嫌な顔をしつつも、カードの山に向き合いました。大丈夫ですよね？　手にカレーの匂いがつくカードゲームなんて嫌ですよ？
「お」
一枚適当に引っこ抜いて見ると、こんなカードでした。

●ブラッディ・イヤリング
闇文明　クリーチャー：ブレイン・ジャッカー
２マナ　　パワー４０００
■ブロッカー
■このクリーチャーは攻撃することができない。
■このクリーチャーがバトルする時、バトルの後、このクリーチャーを破壊する。

すごい、パワー高いです！　究極龍やＦ・Ｇ・Ｄじゃないと倒せないじゃないですか！　こんなの先攻で出されたらサイバードラゴンパワーボンドツインドラゴン二連打ァ！でも相手のライフ削りきれないじゃないですか！　どんなパワーインフレですかこれは！
「２マナだから１ターン目じゃまず出せないわよ……」
紗雪ちゃんに呆れられちゃいました。だってしょうがないじゃないですか、細かいところまでは知らないんですもの。
ボクがカードをじっくり見て騒いでいる間にも、紗雪ちゃんは隣で

頭を悩ませながらデッキを考えてくれています。これは邪魔しちゃマズいですね。わざわざやってくれているのですから、その厚意を無下にはできません。

分からないことは後で聞くとしましょう。

いやぁ、しかしなかなかイラスト良いですね。超獣世界の住人って雰囲気がしっかり伝わってきます。これは大人にも人気があるんじゃないでしょうか。

躍動感あるポージングも、子供の興味をさぞ引くことでしょう。

ネーミングも時々厨二心をくすぐるような、カッコ良いものが多いですし――――

●ドンドン吸い込むナウ
●ドンドン打つべしナウ
●ドンドン叩くナウ
●ドンドン守るナウ
●どんどん掘るナウ

ボクは見なかったことにしました。

「おや？　これは……」

それからしばらくして、ひと際目をひくカードを見つけました。一見他となんら変わらない普通のカードなのですが、イラストが特徴的です。なんとパックを剥いたような絵なのです。

●カモン・ビクトリー
水文明　　呪文
3マナ
■S・トリガー
■E2またはE3のブースターパック1袋を開封し、その中から1

枚選んで手札に加える。残りを自分のコレクションに加える。

開??????

開発者は一体何を考えてこれを作ったんでしょう……。最早存在からして意味不明なんですけど。まるで意味が分からんのですが。

恐らくこれは、開発側のお遊び的なカードなんでしょうね。そうだと思いたいです。まぁでも、こういったユニークなものも子供向けカードゲームなら、案外アリかもしれません。

第一、こういう悪ふざけ的なカードが大会環境に割り込んでくるなんてありえませんしね。……ないですよね？

しかし更に見ていくと、カードの印刷が上下逆になっているものや、明らかに子供の落書きなんじゃないかってものとか、別の漫画のキャラクターが描かれたものとか、とにかくネタ臭漂うものがまぁ出るわ出るわ、それこそネタカードだけでデッキひとつ組めるんじゃないかってくらい発掘してしまいました。

なんかちょっと心配になってきました。大丈夫なんですかこのカードゲーム？　システムバランスは整っていても、プレイヤーのモチベーションを著しく低下させるようではちょっと手が出しづらいんですが……。

いや！　大丈夫です、問題ありません。せっかく紗雪ちゃんとお友達になれたんです、ここで逃げたら一生カードゲームできなくなっちゃいます。それは嫌です。

考えてみれば、悪いところがないＴＣＧなんてありえませんよね。それくらいで挫けていたらカードゲーマーはやってられません。逆境を乗り越えてこそ真の決闘者ですよ。あ、こっちじゃ真のデュエマって言うんですか。ややこしいですね。

よぅし！　ちょっとやる気出てきましたよ！　さぁ紗雪ちゃんがひと段落したら、前向きになっているうちに早速対戦し――

「カレーパンはどこじゃあ！」
「すべッカム！」
「カレーパン、好きだよな？」
「カレーパンを食ってやるぜぇ！」
「カツドンでダイレクトアタックだ！」
「馬鹿が！　イカガ・イカガでブロックだぜ！」
「アン・ドゥ・トロワ！　ハイサイ・ラッシャイ！」
「ああっ！　俺のメリコミ・タマタマがっ！」

もう一回死ねば遊戯王の世界に行けますかね、神様……。

第三話　初めての対戦

デッキ作成をするにあたって、まず何がしたいのか、何を主軸にしたデッキなのかを考える必要があるわけですが、真っ先に考えついたのは、

「こう、相手がデュエル開始と同時に後攻になったら漫画を読み始めてターンを渡さずに勝利できる、みたいなデッキを……」

「ほんとにそんなので良いの？」

別に良いのですが、そんなのをフリー対戦でブンブン回していたら友達がいなくなっちゃうというか紗雪ちゃんに嫌われるのは目に見えていたので、さすがに控えることにしました。

（なら、やっぱりこれでしょうね）

デュエルマスターズというカードゲームの特徴を、最大限生かしたデッキ。

私が作るなら、まず最初はこれだと決めていました。……嘘ですごめんなさい。ワンキル上等でしたすいません。

でも気に入ったカードがあったので、それと相性の良いカードがすべて安価だったのですよ。財布ポイント、もとい、お小遣いの少ない小学生にはうってつけのデッキと言えるでしょう。

これには紗雪ちゃんも否定はしなかったのですが、ボクが使いたいと思ったカードには、ちょっと思うところがあるようでした。

「結構、珍しいカードを選ぶのね。でも良いの？　これ、初心者向きだけど、まだルール覚えてないリオンちゃんが使うにはちょっと難しいんじゃ」

「大丈夫です。紗雪ちゃんが教えてくれればなんとかなります」

「もう、他人任せじゃない」

などと言いつつ、ちょっぴり嬉しそうな紗雪ちゃん、なんだかんだでデッキをまとめるのを手伝ってくれます。

「あ、そうだ。リオンちゃんにこれあげる」

思い出したかのように、ポケットから1枚のカードを出しました。それはストレージには入っていなかった、思わず目を見開いてしまう

くらい素晴らしいイラストのカードでした。
「このデッキと相性は良くないけど、私が持っていても使わないから」
「いいんですか？」
「いいわよ。今日から始めるリオンちゃんへのプレゼントよ」
ニッコリ笑う紗雪ちゃん。なんという女神……ボクが男だったら即刻オトされてますわ。でもその胸にある武器はどうにかしてください。もしくは分けてください。

そして、紗雪ちゃんがくれたカードを入れて、デッキができました。誰ですか良いデッキがデッキるよとか言ったのは？　気のせいでしょうか。
ルール説明をしてくれるそうなので、実際デッキを動かしながら教えてくれることに。
紗雪ちゃんは店頭で初心者用デッキを借りて、デュエルスペースへ。……ちょっと待ってください。そんなのがあるならボクも最初からそれ借りれば良かったんじゃないのですか？
「最初からこんなのに頼っていたらいつまでも強くなれないじゃない。それに、デッキの作り方も早く教えた方が楽だもの」
紗雪ちゃん、ひょっとして面倒くさくなってませんかね。ルール覚えてないのにデッキの作り方教えられてもチンプンカンプンなんですけれど……。
ま、まぁ仕方ないですね。紗雪ちゃんとて小学生、理屈も道理も定かでないお年頃です。ここはボクがおとなしく引き下がることにしましょう。
「じゃあまず、最初の手順から……」
「いえ。ここはまず一回勝負してみましょうよ」
ボクの予想外の提案に驚く紗雪ちゃん。そりゃそうでしょう、まだルールも把握しきれていないのに対戦申し込まれるとは思いもしないはずですから。
「だってリオンちゃん、まだルール知らないんでしょ？」

「大丈夫です。カードなら拾っ……じゃなくて、ルールブックなら拾いましたから」
「どこで？」
その辺です。
真面目な話、細かいルールはわかりませんよ。でもターン手順とか名称くらいなら、ある程度は分かりますよ。慣れるより慣れろ、百聞は一見に如かず。口で説明されるより、実際見たほうが早いものなのです。
「本当にいいの？　説明もするし、一応手加減はするけど」
「平気ですよ。カードゲームなら得意ですから」
「デュエマ、やったことないんじゃ……」
「大丈夫ですから！　ところで同じ名称のカードは3枚まででしたよね？」
「同じ名前のカードは4枚までよ……」
「手札は7枚まででしたね」
「もうダメでしょこれ」
ふっ。紗雪ちゃんは甘ちゃんですね。カードゲームが一種類とは限らんのですよ。この世界には存在しなくても、ボクには遊戯王で培った頭脳があるのです！　ゲイルの効果処理を把握したボクに不可能なんてありません！　サクリファイスは分かりません！　いい加減調整中はやめて下さい！
さぁ、ボクの本気を見せてあげるのです！

「ボルシャック・ドラゴンで、トドメーっ！」
「ほげぇーっ!!!」

負けました。あれぇ？

第三話　初めての対戦

おかしい。これは絶対おかしい。何かの間違いだ、そうに違いありません。この可愛……オホン、このボクが負けるなんて信じられません。きっと何かあったんです。そう、これはデッキが事故ちゃったんです。

「何も考えずに攻撃すればそうなるわね」

何も言い返せませんでした。

体験してみて分かったのですが、このゲーム、構築によってはデュエルの優劣がアッサリ覆ります。遊戯王みたいに一度動き出して止められなければ大量展開して即攻撃、そして勝利、とはいかないようで。手札や墓地が重要なのは大抵のＴＣＧの共通認識なんですけれど、デュエマはそこにシールドの概念が入ってくるわけです。

シールドがライフ代わりとなっているらしく、攻撃するたびにシールドが手札に入ってくるので、次のターンでの行動の選択肢が増えるため、その都度チャンスが訪れる。このシステムはなかなか面白いと思います。ワンサイドゲームになりきらず、すべてのデッキに等しく逆転の機会を与えているのですから。

回せば勝てる、だけで済まないのがデュエルマスターズ。一方的な展開を行っても、「シールド」があれば逆転の見込みは十分あるとのこと。

このように大胆な逆転劇をあらゆるデッキでも再現可能なカードゲームって珍しい気がします。たいていのＴＣＧだと、回した者勝ちですからね。

どんなデッキでも勝てる可能性はゼロにならない。それは大きな長所と言えるでしょう。

……プレミアム殿堂とかいうオーバースペック系カードの存在はさておき。出しただけでエクストラターンとか、おかしいでしょう。八咫烏？　ＤＤＢ？　知らない子ですね。

「とりあえず、これでどういう特徴があるのかは分かったでしょ？」
「そうですね」
おおまかな特徴は掴めたと思います。たぶん。
そりゃあ一回や二回回して全貌がつかめるなら苦労はしませんよ。
「じゃあ、あとは整えていくだけね。いらないカードを抜いて、必要になるカードを補充して」
「動きが円滑になるような形にもっていく、と」
デッキの構築を最善にもっていく。ＴＣＧの醍醐味って、大会に出て勝負に勝った時と同じ位、構築をあれこれ考えている時って楽しいものですよね。
「見せてもらいましょうか、３０００円で作れる大会でも通じるガチデッキの実力とやらを」
「そんなの無理よ」
「えー……」

そんなこんなで。
紆余曲折を経て、ボクの最初のデッキが完成しました。
「で、できましたぁ……」
どっと疲労感が押し寄せてきました。た、大会用のデッキ組んだ時でさえこんな疲れることなかったんですけど。
自分が知らないカードゲームを一から始めるのが、これほど大変だとは。遊戯王とはまったく勝手が違うからなおさらでした。
けれども、疲労と同じか、それ以上の満足感がありました。
強いカードや弱いカードを組み合わせて、新しい発見を見出した時の喜び。それと似ています。やっぱり、あれこれ考えて、苦労して自

分でデッキを作った時のあの感じは良いですね。
「最初強いカードにしか目が行かなかった人とは思えない発言よね」
紗雪ちゃん水をささないでください。折角余韻に浸っているんですから。
「本当なら、始めたばかりのうちはもっと分かりやすいデッキの方が良いんだけれど」
「大丈夫です！　ボクにかかればどんなデッキだってお茶のサイサイです！」
「その自信はどこから湧いてくるのかしら」
さて、いよいよ完成したこのデッキのお披露目といきたいところなのですが、残念ながら紗雪ちゃん、今日は自分のデッキを持ってきていないのです。だからさっき初心者用デッキなんて借りてたんですね。
また同じデッキでお願いしても良いのですけれど、いかんせん向こうは初心者用デッキなので動きが単純で、何度も見ていると弱点が分かってきてそれに合わせて動けてしまいます。
なら違うデッキを借りて来よう、と紗雪ちゃんが席を立とうとした、その時でした。

「フッフッフ……対戦相手をお求めかい？　それなら、このオレが相手をしてやろう！」

どこからともなく声がしました。
紗雪ちゃんと一緒に振り向くとそこには、赤い髪に全身黒いビニルスーツみたいな格好の少年が立っていました。

「毒蛇王蛇美羅！　このポイズンデッキでな！」

……えっと。
「1、1、0と……」
「コラコラコラ！　なんでだいきなり通報しようとしてんだ！」
そりゃあ変態を見たら即通報は常識ですよ……って、ああ、よく見たらライダージャケットみたいな感じですね。てっきり幼くして才能を開花させた若き変態かと思いました。多分この考えは間違ってないでしょうそうでしょう。ていうかどうにかならないんですかそのセンス。もっと腕にシルバー巻くとかさ！　ないですね。というかＴＭレ〇リューションで見かけたような……。
「あら、誰かと思えば変た、蛇美羅じゃない。何しに来たのよ」
「へっ！　久しぶりにショップに来てみりゃ、新入りがいるじゃねぇか！　だったら先輩からのゴアイサツってことで、俺様の新デッキの餌食にしてやろうってわけだ！」
「また近所の年下の子供相手に負けたからって、初心者でストレス発散するなんて見苦しいわよ」
「ぐ……うるせーっ！　オレ様だってな！　いつも一生懸命なんだよ！」
ちっとも意味が分かりませんが、もしかして対戦したいんですかね？　この年頃の男の子って素直じゃないから、下手に刺激しちゃうと意地張っちゃうみたいです。
ここは一度落ち着いてもらいましょう。
「ステイステイ」
「シャーッ！　犬じゃねーんだよ！」
キャンキャンうるさい人ですね。
蛇美羅とかいう少年は既にやる気満々でした。人の話はちゃんと聞きましょうって先生に教わらなかったのでしょうか。
まぁ、そんなに勝負したいならしてあげるのもやぶさかじゃないのですけれども。ため息をつきながらもデッキを持ったボクを見て、紗雪ちゃんはギョッと目を剥きました。
「ちょっとリオンちゃん、大丈夫なの？　まだあなた初心者なのに。

蛇美羅だってどれだけ三下臭漂っていてもあなたよりデュエマ暦長いのよ？」
「大丈夫ですよ。年下の子にボコられて泣き寝入りするような変態コスプレイヤーには負けません」
「お前ら……！」
わなわなと震え出す蛇美羅とかいう少年。ちょっとイジりすぎましたかね。
「俺様を侮辱しやがったこと、後悔させてやるぜ！　いくぜ！　シールド展開！」

――決闘開始（デュエマ・スタート）